

悲しき変態、 短小露出魔

ヒモ男が女に催眠術を掛けられ、
露出が生きがいとなる。

女に嘲笑されながらも

露出せずにいられない

悲劇の変態が誕生した！



玉子王子 著

1 章 悲しき変態、「短小露出魔」が生まれた日

「あら、Tくんチンチ○小さいのね」



保育士の女。

——嘘でも何とかそれらしいこといえ、クソ女！

思うが、口に出来ないT。

いや、思ってもいなかった。

もうずっと昔、子供だったころの記憶。

モジモジしながら、大人の女にズボンを下ろされるのにドキドキしていた。

子供心に、周りのものより小さいとわかっていた男のシンボルをクリクリと保育士の柔らかい指に摘まれる。

「あれ……これで立ってるんだ？」

チラチラと、周りを気にしながらいう保育士。

夢だ。

目を開ける。

寝てしまった。

今、女の部屋にいた。間もなくソープから帰って来る。

今日は給料日のはずだ。

給料は当然振込みだが、自分に渡すために下ろしてくる。

女が二十の時からもう五年もそうしている。

Tはいわゆるヒモという奴。女にぶら下がり、金を出してもらって生きている。

見栄えはそこそこ、だが、モテる理由はモテてきたから、というしかない。

そこそこいい見栄えで、子供のころからまあまあモテていた。

だから女の扱いもわかるし、「モテる人間」として自分も振舞うし周囲にも扱ってもらえる。

まあ、そんな事はどうでもいい。

今も五人ほどの女にぶら下がり、一人つき十万ずつ借りるという名目で引き出し、働かずに月五十万の収入。

安アパート。

直接Tに払う金は十万ずつでも、余所でした借金の肩代わりなどさせているので、女の手元には余り金が残らない。

ソープで働いて「金が残らない」など悲惨すぎる話だろう。

だが、そういうのを気にしないからこそTはヒモになれる。

「Tちゃん、来てたんだ」

「会いたかった」

大げさに言う。

適当に話をしようとするが、女の様子が普段と違った。

金を出したくない、という話だ。

ソープも疲れたので実家に帰りたい。そのために借金を清算するので、もうTに渡す金はないという。

安っぽい机と椅子。

向かい合って座る二人。

「借金は私が払いきるから……Tちゃん一緒に田舎に来てよ。この町にいても仕方ないでしょ？」

そんな事はヒモにたかられる程度の女に言われたくない話だった。

眉を顰めるT。

「借金払うって、それは前からそうだろ。肩代わりしてくれたんだから、俺は感謝してるぜ。それで終わりの話のはずだ。恩に着せるなよ」

「あ、ごめん……で、どうかな？」

「もちろん嫌だね。誰が田舎なんか」

立ち上がる。

「あ、Tちゃん」

「それじゃ、もう会うこともないな。飽きてきたし、ちょうどいいわ。ま、元気でな」
パン、と机を叩くようにして立ち上がる女。

「ま、まって、それどういうこと？」

「どうって……どうもこうもないけど」

そうだ、どうもこうもない。

金で付き合っただけなのだ。

いや、好きに抱ける女がその女一人だけならTも考える。

だが似たようなのが何人もいるなら、金を出さないものに用はない。

金を出すものと余分に時間を過ごすべきだろう。誰でも似たようなものなのだから。

むしろ金を出さないものと長い時間を過ごすのは他のものに失礼といえる。

「う、嘘、まって」

「それじゃ、これまで通り？」

何度か、似たようなやり取りはしてきた。

金で男を繋ぎ止める人生は辛い。

途中までは辛い。

しかしあと何年もして、三十ぐらいになれば女も諦める。

そういうものだとヒモの先輩に聞いていた。

三十までヒモに貢いで風俗で働くだけだった女は最早何も持っていないし、新たに手に入れる時間もない。男なら三十からでもなんとかなるかもしれない。だが風俗で働いていた三十過ぎの女を新たに選ぶ男は中々いないと先輩は笑っていた。

自分がそういう女にさせておいて、とTは多少腹も立ったが、かといってヒモをやめようとは思わなかった。

とにかく、目の前の女だ。

まだ二五歳。

やり直せるギリギリ。やり直せるからこそ、やり直そうか、それともこれまで通り愛を信じるかと悩み、一番きついところだろう。

この辺の年齢では、むしろ甘くして逃がさないようにするべきとも先輩から聞いていた。

逃げられなくなってから、本格的に絞りにいけと。

Tはそこまで割り切れなかった。

だから、分水嶺の女にも今まで通り振舞ってきた。

女が涙ぐむ。

「Tちゃん、怖いよ……あと何年かしてから、こうやって別れたら私何も残らないし」

「それじゃ、今別れて田舎に帰りゃいいじゃん」

冷たいようだが、取り返しが付かなくなるまで逃がさないように優しくするよりよほどましだろう。

まあそれは結果論で、彼としては優しくするのが面倒というものもあるが。

俯く女。

「そ、そうなんだ……それじゃ、私にも考えがあるわ」

「ん？」

五年もたかられ、金を出さないといったらあっさり捨てられる。

そんなことをされた人間の「考え」はあまりTにとっていいものではないだろう。

チラ、と台所を見る。

出口にはTの方が近い。

包丁を取りに走れば、逃げる。

机を途中に投げ倒し、チェーンや鍵を外す時間を稼ぐ。

余裕でいけるはずだ。

「催眠術習ったの」

「催眠術習ったのか……」

オウム返ししか出来ない、よく分からない報告。

お茶を指差す。

「普通なら中々私なんか掛けられないけど、睡眠薬飲ませて判断力を落とせばいけるわ」

「な……」

いわれて、そういえば眠いと気づく。

先ほど寝て、女が帰ってきて起きたばかりだというのに。

薬を飲まされたせいだ、と思うT。実際には、そう「思わされた」からである。

ブラシーボ効果という奴だ。茶を入れたのは別れようと言われる以前なのだから、都合よく睡眠薬を入れているわけもない。

が、まだ眠り足りないところで女が帰ってきて起されたTは睡眠薬などなくとも眠い。

それを睡眠薬のせい、といわれたため、信じ込んでしまった。

「な、なにをやる気だ……」

暴れるべきか、と思って拳を握る。

バ、と手を広げ、制するように出してくる女。ビク、と体を引きつらせるT。

「大丈夫、何もしないから座って」

「そうか……」

フラフラしながらいわれたとおりに座るT。

「これから何か、いい気分になってくるわ」

「なってきた……」

「これからいうことは、私が忘れるようにいえば忘れるのよ」

「わかった……」

「それじゃ、これからあなたの本当の願いの話をするわ。ずっとしたかったこと」

「俺がしたかったこと……」

しばらく後。

気が付くと、Tは駅のベンチに座っていた。

朝、出勤時間だ。

「ん……なんだ、寝たのか」

直前までなにをしていたか思い出せない。

よく考えて、やっと思ひ出す。

朝方、ソープから帰って来る女を待つて集金したが、女が金を出さないといったので、別れたのだ。

「まあ、あの年じゃ客も減るだろうし、そうなりゃ俺への金も減る、切り時だな」

十万ずつ定額とっているが、取れそうならもう少しというか、取れるだけ取る。

つくづく、別れたほうが女の人生にとってもプラスだろう。

立ち上がる。

電車がくる。

が、乗れない。女性専用車両だ。

出勤前の女性たちで一杯である。元から乗る隙間はなさそうだ。

舌打ちして、再び座ろうとする。

が、ふと思いつく。

——そうだ、あれやってみよう。前からやりたかったこと！

ガチャガチャとベルトを外す。

少し待ち、電車がそろそろ出るというタイミングで扉の前に立つ。

出入り口近くの女性が前に立つTに気づく。

「あ、女性専用ですよ……あっ！　ちょ、何してるの！」

顔を真っ赤にし、同時に恐怖に引きつらせる。周りもすぐに気づく。

Tがズボンを下ろそうとしている事に。

「きゃあああ！　こ、この人変態……」

「へへへ、面白いもんみせてやるぜ！」

ズボンが落ちる。

そしてパンツをひき下ろす。

腰を突き出す。顔を真っ赤にした女たちに、見た事がないわけがない男のものを見せ付ける。

プルン、と体格にまったく見合わない**極小の男性器**が事態に気づいて赤面し、顔を引きつらせた女性たちの前であらわになる。

「ほら、どうだ！」



「ほら、どうだ！」
「きゃああああ！やだ、ちょっとあれ見てよ！」
「うわ、酷いわ、チ○ポ小さい！」

「え、嘘！？ 短小チ○ポなのになんで露出してるのあの人！？」
「爪楊枝じゃん！」
「爪楊枝はいいすぎよ！ 爪楊枝十本分ぐらいの太さはあるわ！」
顔を赤らめ、変態に恐怖していた女性たちだが、
Tの股間が丸出しになると一斉に噴出し、安心したように笑い出す。

というか、嘲笑しだす。

「きゃああああ！って、やだ、ちょっとあれ見てよ！」

「うわ、酷いわ、チ○ポ小さい！」

「え、嘘！？ 短小チ○ポなのになんで露出してるのあの人！？」

「爪楊枝じゃん！」

「爪楊枝はいいすぎよ！ 爪楊枝十本分ぐらいの太さはあるわ！」

顔を赤らめ、変態に恐怖していた女性たちだが、Tの股間が丸出しになると一斉に噴出し、安心したように笑い出す。というか、嘲笑しだす。

別に露出狂が短小だとしても、安心する理由はない気がする。

サイズよりむしろ圧倒的な人数であることが、彼女らの安心の源泉ではないか。

しかし、あまりにもそのTの男性器の小さが彼女らの意識をひきつけ、自分たちがあたかも「短小だから安心した」かのような錯覚を抱かせた。

それがさらに、彼女らを嘲笑に駆り立てる。

「見てみて、ヤバイよあれ！」

「あれは露出狂どころか立小便に勇気がいるレベル！」

「むしろありがとう！ これからはどんなしょぼいチ○ポも巨根に見えるわ、あなたの超小指チ○ポ

と比べたら！」

「ぎゃはははは、ち、チ○ポ……チ○ポ小さい……小さいって……しかも露出するって……」

ギャルっぽい一人など、引付を起してその場に膝を突き、白目さえ剥く。それでも晒うのをやめない。

女たちが恥かしがり、嬌声を上げると催眠術で思い込まされているTは彼女らの対応に驚愕する。

冷静に考えれば、驚愕する事に驚愕するしかないが、とにかく愕然とした。

一瞬後、顔を真っ赤にして、屈辱にそれを歪ませる。

唇を噛み、震える。

短小、短小、女たちはさまざまな表現でそれを繰り返し、勘違いの仕様がないうに念を入れてTの股間を指差してくる。普通の男になら絶対にしないが、「露出狂」という犯罪者に対してであるから、まったく遠慮がない。

痙攣し、唾を飛ばし、乳房を揺らし、足を踏み鳴らしてスカートが短いものなどパンツが時々見えるほどだが、もう狂乱状態の女たちはまったく気にしない。

とにかく晒われている。

Tを晒わないなど不可能であった、というぐらいに晒われている。

女たちに、男のもっとも大事な部分を、セックスで彼女らを喜ばせるはずの臓器を、そんな事はまるっきり可能性すらないと鼻で笑われるように、嘲笑されている。

ギュ、と陰囊が縮み上がり、ただでさえボリュームがない男性器を余計に際立たせる。

その間にも、嘲笑の声を聞いて車両中から女たちが集まってくる。

「え、何？ あ、うわっ！ 嘘でしょ！」

扉の前にいた者たちだけではなく、周りからも女性たちが集まってくる。

女性専用車両なので周りの男に遠慮しておしとやかに、というような気遣いが無い。

当然のように、丸出しの極小男性器を指差して叫ぶ。

「ちょっと、露出狂！ 見てよ！」

「見たくないわよ！」

「極小チ○ポなのよ！ こんなの初めてよ！」

「え、極小チ○ポ露出してんの？ あ、わかったわ、罰ゲームね！」

「ええ？ そうなの？」

「でも始めはマジで楽しそうだったけど」

「今はキ○タマキュンキュンに縮んでるわよ！ キュンキュンに縮んでるわよ！ チ○ポもほら、毛にもぐりこむほど萎んでる！ しかも超包茎だし！ 見てみてチ○ポ！ 包茎チ○ポ！ 包茎よ！」

「うわ、本当だ！ チン皮スルメみたい！」

「っていうか、私保育士で、トイレの世話してるけど……」

一人の若い女が話し出す。と、横の女が止める。

「あ、それはかわいそうよ！」

「そっか！ そうよね、世話してる背丈三分の一の男の子たちのよりおチ○ポペ○スが小さいなんて、いわないほうがいいわよね！」

「思い切り言ってるし！ チ○ポコ、幼稚園児より小さいって！」

ゲラゲラと、情け容赦なく笑いまくる女たち。

男のもっとも繊細な尊厳ある部分を唾を飛ばす気負いで嘲笑される。しかも別に相手はTに悪意や敵意を持つ理由はない——露出は、単独で遭遇するならまだしも、この状況では一種の「芸」であるかのように捉えられていた——ごく平常な心もちで、股間を見て出てくる言葉や感想が「嘲笑」なのだ。

真っ赤になったり真っ青になったりする。

そして震えながらも、なぜか股間をしまおうと思わないT。

それを見ながら、一人の女が顔を赤らめる。

「うわ、あんな小さいチ○ポあるんだ……」

「やだ、全部丸出し……見れないよ。あ、ホントにチンチ○小さい……」

中には恥ずかしがるものたちもいる。しかし、顔を背けつつもしっかり見て、小さいことははっきりいつてくる。

むしろそういう遠慮がちな人間にさえ、しっかり**言葉の急所攻撃**をかまされるのは余計ダメージが大きかった。

そして、大多数は遠慮も何もない。

「ぎゃははは！ 皆に見せてあげないと！」

「怪人短小チ○ポ登場と」

「アレでもギリセックスには問題ないと思うけど……健康な範囲内なら絶対最小クラスだよ！」

「健康な範囲内最小って！」

恥ずかしがるのは少数派で、大体は手を叩き、携帯で写真を撮りつつ笑いまくる。

もちろん、「恋人がはじめて服を脱いだ」というような状況なら、彼女らもモノが同じでも別の対応をとるだろう。

と、信じたいものだ。

しかし「露出狂」という犯罪者としても苦笑と共に受け取られてしまう、**尊厳なき存在**として表れ、さらされてしまった短小の一物には、いかなる余分の防御も保護も与えられなかった。

扉が閉まる、というアナウンス。

ああ、と残念がる女たちの声を扉が遮断する。

プシュウ、と扉を閉める装置が音を立てる。

電車が走り出す。Tは先頭の車両の真ん中の扉の前に立っていた。

当然、走り抜ける電車のなかの女性たちもそちらに向けて露出されているものを見て、目を見張る。

「ちょ、あいつ丸出し！ おチンチ○丸出しよ！」

「っていうか、小さくなかった！？」

「こんなだったよ、こんなん！」

「見間違いよ！ 赤ちゃんじゃないんだから！」

「でもマジでこのぐらいだったけど！」

「小さいわ！ チ○ポ小さい！」

「ウチの彼氏も短小と思ってたけど、むしろ巨根って気がしてきたわ！」

「いいもんみたわね！ 超絶小チ○ポ！」

「ああ、見逃した！ ホントにそんな短小チ○ポで露出してる人がいたの？」

電車の中は、一瞬でTの股間に関する話題で沸騰する。

燃え上がり走り去る電車と、Tが一人立ち尽くす駅。

まったく誰もいないわけではないが、下半身丸出しのTに気づかない程度にはまばらだった。

呆然と、縮み上がった股間を丸出しにしたままTは何もない正面を見ていた。

「俺は……何であんなことを……」

自分でもまったくわからなかった。

催眠術を掛けられ、「露出が生きがい」と思い込まされているなど、考えもしない。

ヒモとして女にモテる人生を送っているのに、モノが並外れて小さいことは気にしない顔をしてきた。

しかし、やはり男であるから自分のシンボルの小ささは気にしてきた。

なのに、露出してしまった。小さい男根を丸出しにした、しかも特に好意も何も持ってくれていない女たちの前で。

わけがわからない。

しかしそれでも、まだ露出がしたくてたまらなかった。

ここに、「短小の露出狂」という悲しき変態が誕生した。

しかも、別にドMでもなんでもなく、短小を嘲笑されたいわけではない、嘲笑はガックリくるのだ。

とことんやっつけられない話だが、それでもTは露出をせずにはいられなかった。

いまだにしまわれない裸の尻に冷たい風が吹き付ける。

体験版終わり

この後、悲しき変態Tは女子校生たちの群れの中で露出し、短小を嘲笑されます

さらに、逮捕にきた婦警さんに短小を同情されて「逮捕してもらえない」という屈辱を味わいます

続きは製品版でお楽しみください